

マルビシ百貨店の映像作品制作プロジェクトの報告
—地域資源を活用した現代アートの可能性

The Possibility of Contemporary Art Utilizing Local Resources
—Project to Create a Video Work for the Marubishi Department
Store

宇野 君平
Kunpei UNO
田口真太郎
Shintaro TAGUCHI

マルビシ百貨店の映像作品制作プロジェクトの報告 —地域資源を活用した現代アートの可能性

The Possibility of Contemporary Art Utilizing Local Resources
— Project to Create a Video Work for the Marubishi Department Store

宇野 君平
Kunpei UNO

准教授（美術領域）

田口真太郎
Shintaro TAGUCHI

助教（未来社会デザイン共創機構）

We interviewed relatives of the founding members, as well as local residents, about the history of the Marubishi Department Store, which was a symbol of the Ginza shopping district in Hikone City, Shiga Prefecture. Tracing from its history from construction to its demolition, we collected people's memories and documentary materials such as photographs and videos, and created a video report on the activities of the art project called Memory's Varves : Recollections of Marubishi. In this paper, we report on our activities. As a result of feedback on the work through a questionnaire survey conducted through screenings of the video in the Ginza shopping district showed that the video is considered, it became clear that the work has high potential as a new local-regional resource that has high potential for contributing to future regional revitalization.

1. はじめに

宇野は地域に関わるアートプロジェクトに参加すると、「地域資源」の活用をよく依頼される。一般的に地域資源とは、地域の特産物や名産品、または風光明媚な自然や文化遺産などの産業資源を意味する〔註1〕。しかし、美術家に期待されるのは、地域の課題を見しその問題提起から意識の変革を促すような表現である。本プロジェクトで注目する地域資源とは、産業資源に限らず地域の課題から発見される全ての物事である。それらを題材に美術家として作品制作に取り組むことで、新たな地域資源の可能性を地元へ示唆していくことが、地域と関わる現代アートの可能性だと考えられる。

2020年10月10日から11月23日にかけて、滋賀県近江八幡市の旧市街地と彦根市の旧城下町地域で同時に開催された「BIWAKO BIENNALE 2020 森羅万象 COSMIC DANCE」において、宇野は「彦根銀座商店街」の空き店舗（元「ノムラ文具店」）を会場に、彦根城の旧外濠とマラリアの関係をテーマに、当時の記録映画やインタビューなどを素材に映像作品《濠と瘧》を発表した〔註2〕。

その際、この商店街でギャラリーを営む小島充子氏から、映像作品《濠と瘧》に昭和20年代のマルビシ百貨店が登場する場面を見て、

マルビシ百貨店がこの地域のシンボルであったこと、幼少期にこの百貨店で遊んだこと、建物が解体されるときのせつない想いなどが語られた。後日、宇野は小島充子氏から、マルビシ百貨店が建設される様子を記録した映像『マルビシ百貨店の建設から (DVD)』と、この建物が解体される様子を撮影した画像(197点)を提供され、これらを素材にマルビシ百貨店をテーマにした映像作品制作の相談をいただいた。

この相談がきっかけとなり、宇野は、2021年4月に小島充子氏を通じて彦根銀座商店街(彦根銀座街商業協同組合)からマルビシ百貨店をテーマにした映像作品制作の依頼を受けたので、これを本学との受託研究「マルビシ百貨店の映像作品制作プロジェクト」として取り組んだ。本プロジェクトでは、宇野がマルビシ百貨店に関する調査活動、作品制作、上映会を担当し、田口が上映会で集めたアンケートの分析を担当した。

2. マルビシ百貨店の映像作品制作プロジェクトについて

2.1 プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、彦根銀座商店街にかつて存在していたマルビシ百貨店をテーマに、建設から解体され現在に至るまでの記録と記憶を掘り起こし、そこで得られた情報や資料を素材に映像作品を制作することで、その成果を新たな地域資源として還元し、これからの中店街の活性化や地域振興にいかすことである。

プロジェクトに着手した2021年4月時点では、マルビシ百貨店に関する歴史や影響を網羅する資料がみつからなかった。そこで、今回のプロジェクトでは、以下の3つの目的を設定した。

- ①調査活動：マルビシ百貨店の記録と記憶を掘り起こし、映像作品の制作につながる情報や資料を収集する。
- ②作品制作：調査活動から得られた情報や資料を活用して映像作品の制作に取り組む。
- ③地域還元：映像作品は、上映会を通じて地域に還元し参加者に対してアンケートを実施して今後の展開のための示唆を得る。

2.2 プロジェクトの実施方法

本プロジェクトは、彦根銀座商店街と連携し、以下の3つのステップにしたがって取り組んだ。

①調査活動：マルビシ百貨店関係者への取材

マルビシ百貨店が営業していた当時の様子を知る人物や、直接関係のあった人物(創業者、出店者、従業員、利用者)とその親族などにインタビューを中心に取材し、マルビシ百貨店に関する情報や資料(映像、写真、文献)の収集に取り組んだ。これらの取材を通じて得られた情報や資料を整理し、映像作品で取り扱う内容を精査した。

②作品制作：マルビシ百貨店をテーマにした映像作品の制作

調査活動で得た情報や資料を活用して映像作品を制作した。

③地域還元：彦根銀座商店街にて完成した映像作品上映会

彦根銀座商店街が毎年11月に開催している「ゑびす講」に合わせ、商店街の一角を会場に映像作品の上映会を実施した。会場では、映像作品とともにマルビシ百貨店に関する資料も展示した。また、来場者に対してアンケートを実施し、マルビシ百貨店の認知度や認識、上映会を通じた作品への評価などの意見を収集した。

3. 調査活動

3.1 調査活動にむけて

マルビシ百貨店を調査する手がかりとして、小島充子氏から提供された映像『マルビシ百貨店の建設から (DVD)』と、この建物が解体される様子を小島充子氏が撮影した画像（197点）の分析からはじめた。

映像『マルビシ百貨店の建設から (DVD)』[図2]は、「有限会社いと重菓舗」の藤田益平会長の父親が戦前に撮影した動画を、近年に息子が東京の業者に依頼してDVD化したもので、そのコピーを小島充子氏が譲り受けたものであった。全編は63分53秒で、以下の5つのチャプターで構成されている [表1]。

マルビシ百貨店がいつ建設されたのかについては、昭和6年 [註3]と昭和8年 [註4]など諸説存在していたが、この映像から「地鎮祭」が昭和8年（1933年）3月22日、「上棟式」が同年7月10日であることが記録されており、昭和8年（1933年）に建設されたことが明らかとなった。

表1 映像『マルビシ百貨店の建設から (DVD)』の構成について

チャプター	内容	分秒
①マルビシ百貨店の建設	「地鎮祭」、「工事中」、「上棟式」、「開店・披露宴・余興」、「マネキン娘」の順にそれぞれの様子が収録されている。	12分58秒
②マルビシ祭	マルビシ百貨店の開店を祝う仮装パレードの様子が収録されている。	20分23秒
③慰安旅行録	マルビシ百貨店の創業者メンバーが旅先で豪遊する様子が収録されている。	5分31秒
④祭り	武者行列の様子などが収録されている。	2分31秒
⑤愛児、家族	前半は撮影者の家族の様子が収録されており、後半はマルビシ百貨店の屋上で社長と従業員が体操する様子などが収録されている。	23分4秒



図2 映像『マルビシ百貨店の建設から(DVD)』より

解体の時期に関しては、マルビシ百貨店の建物が解体される様子を小島充子氏が撮影した画像(197点)【図2】の撮影日時を確認することで、平成20年(2008年)に解体工事が行なわれていることが確認できた。

画像(197点)は、全て平成20年(2008年)に撮影されたもので、11月23日(2枚)と11月30日(19枚)は、解体のために足場が組まれる様子が撮影されており、12月4日(8枚)、12月8日(20枚)、12月9日(9枚)、12月10日(6枚)、12月11日(10枚)、12月15日(9枚)、12月17日(29枚)、12月18日(30枚)、12月19日(28枚)、12月20日(27枚)にかけて徐々に解体されていく様子が撮影されていたが、解体が完了した様子は撮影されていなかった。



図3 マルビシ百貨店の建物が解体される様子を12月20日に撮影した画像より

小島充子氏から提供された映像と画像の分析から、マルビシ百貨店の建物が昭和8年(1933年)に建設され、平成20年(2008年)に解

体されていることが明らかになった。本プロジェクトにおけるマルビシ百貨店の調査は、その記憶と記録を掘り起こすことであり、それは建物が解体された後も存在することから、調査の範囲を昭和8年（1933年）から現在までとして取り組むこととした。

昭和8年（1933年）から現在までのマルビシ百貨店の歴史を整理したものが【表4】である。実際にマルビシ百貨店として営業していたのは、【表4】の「①戦前のマルビシ百貨店」と「④戦後のマルビシ百貨店」であることが確認できる。「①戦前のマルビシ百貨店」の閉店から「②軍需工場」として活用された時期や、「②軍需工場」から「③満連百貨店」と呼ばれるようになった時期については、正確な年代を確認できなかった。「④戦後のマルビシ百貨店」が「⑤パリヤ」【註5】に売却される経緯や、「⑤パリヤ」が本店として開店する経緯については、今回の取材によって確認することができたが、その後の「⑤パリヤ」から「⑥平和堂 銀座生活館」【註6】、「⑦ザ・ダイソー 100YENPLAZA 彦根銀座店」、「⑧平和堂 彦根銀座店の駐車場」へと移行する時期については、正確な年代を確認できなかった。

表4 マルビシ百貨店の歴史

時代区分	年代	概要
①戦前のマルビシ百貨店	昭和8年（1933年）～不明	宮本寿太郎氏を代表に地元の有力商店主（10名）によって、昭和8年（1933年）に4階建て鉄筋コンクリート造りのモダンな百貨店として建設され、同年10月1日に開店している。当時は湖東地方で唯一の百貨店としてにぎわっていた。1階と2階には洋菓子部、文具部、洋品部などが出店しており、3階は洋食のレストラン、4階（屋上）には、お稲荷さんが祀られ、小さな遊園地や動物園もあった。その後、戦争の影響で閉店しているが、その時期は不明。
②軍需工場	不明	戦争の影響が大きくなると、航空機の部品を製造する軍需工場として活用されていた。軍需工場であった時期は不明。
③満連百貨店	不明	軍需工場の経営者が、戦後に満州からの引揚者に店舗としてこの建物を貸したことから、1階と2階は闇市同然の様相となり、通称「満連百貨店」と呼ばれていた。3階はダンスホールだった。満連百貨店やダンスホールの営業期間は不明。
④戦後のマルビシ百貨店	昭和31年（1956年）～昭和41年（1966年）	戦前の経営陣（地元の有力商店主たち）が昭和31年（1956年）に改修工事をおこない再開したのが「戦後のマルビシ百貨店」である。この時期に京都の「スター食堂」（洋食店）も3階に出店している。地元の有力商店主たちと満州からの引揚者という立場の違う出店者がまとまらず、昭和41年（1966年）にスター食堂の撤退を機に閉店している。
⑤パリヤ	昭和43年（1968年）～昭和62年（1987年）	「戦後のマルビシ百貨店」は、閉店後の昭和43年（1968年）11月に「有限会社パリヤ」に売却され同社の本店となる。翌年3月に「レストラン輪ごん銀座店」を3階に開店。昭和47年（1972年）8月に増築工事をおこない1階と2階に衣料品店を開店し、同年9月に「株式会社パリヤ」に組織変更している。その後も増改築工事を重ねながら、昭和53年（1978年）に1階に「Pマート」（食料品小売店）2階に衣料品店、増築した1階に「プチ・サンジェルマン銀座店」（パン屋）を開店。昭和54年（1979年）3月に本店を移転してからは、「パリヤ彦根銀店」として営業を続けるが、昭和62年（1987年）8月に、同所から撤退している。
⑥平和堂 銀座生活館	不明	「パリヤ彦根銀店」が撤退したあとは、「株式会社 平和堂」が「平和堂 銀座生活館」として引き継ぐことになるが、その経緯や営業期間などは確認していない。
⑦ザ・ダイソー 100YEN PLAZA 彦根銀座店	不明～平成20年（2008年）	「平和堂 銀座生活館」から「ザ・ダイソー 100YENPLAZA 彦根銀座店」になる時期は確認していない。当時の店内は、1階の全てが「ザ・ダイソー」で、2階以上は老朽化のため使用されていなかった。平成20年（2008年）に建物の老朽化により解体工事がおこなわれた。
⑧平和堂 彦根銀座店の駐車場	不明～令和4年（2021年）現在に至る	平成20年（2008年）の解体工事が完了した時期は不明であるが、令和4年（2021年）現在は、「平和堂 彦根銀座店」の駐車場となっている。

3.2 調査活動の実施

彦根銀座商店街の方々を中心に、マルビシ百貨店の関係者（創業者、出店者、従業員、利用者）とその親族などを対象に取材を行った。取材の方法はインタビューとし、宇野と小島充子氏が聞き手となり、カメラマン（1名）に撮影を依頼して、取材対象者の自宅や店舗などで行った。インタビューの内容は、マルビシ百貨店について〔表4〕の「①戦前のマルビシ百貨店」から「⑧平和堂 彦根銀座店の駐車場」の時代区分ごとに「印象に残っている思い出」や「その当時の資料（映像、写真、文献）」について質問した。インタビューの際は、小島充子氏から提供された映像や画像を見ながら、対象者が思い出したこと語る形で行った。

また、マルビシ百貨店の多面的な価値を調査するため、この商店街の再生にむけた活動に取り組んでいる方々への取材にも取り組んだ。

令和3年（2021年）3月、宇野は、彦根銀座商店街を通じて、平成26年（2014年）からこの商店街のサポートをしている「有限会社 田辺コンサルタント・グループ まちひとこと総合計画室」の取締役副社長である田邊寛子氏と、令和2年（2020年）から「彦根銀座商店街の防火建築帯の活用とそれによる街づくり」〔註7〕に取り組んでいる、立命館大学 理工学部 建築都市デザイン学科 准教授の阿部俊彦氏と出会う機会を得た。田邊寛子氏と阿部俊彦氏は以前から交流があり、令和2年（2020年）から連携して、この商店街の再生に向けた活動として、地域の方々との勉強会やワークショップなどを実施している。宇野は、田邊寛子氏と阿部俊彦氏に本プロジェクトの趣旨を説明し、この商店街の再生に取り組んでいる専門家として両氏に取材を依頼した。

令和3年（2021年）8月29日から31日までの3日間、「阿部俊彦研究室」は、この商店街のテナントを活用して、「地域の資源の発見と活用を地域の方と一緒に考える」をテーマにワークショップの実施を計画していた。宇野もこの時期に調査活動を計画していたので、この会期に合わせて取材することとなった。

取材の方法はインタビューとし、宇野が聞き手となり、カメラマン（1名）に撮影を依頼して、ワークショップ会場であるこの商店街のテナントで行った。インタビューの取材対象者は、田邊寛子氏と阿部俊彦氏と「阿部俊彦研究室」のゼミ生（4名）を対象に行った。インタビューの際は、『マルビシ百貨店の建設から（DVD）』を見ながら、それぞれの視点から語る形で行った。また、『マルビシ百貨店の建設から（DVD）』の開店当時の様子を現在の風景で再現するシーンの撮影にも、阿部俊彦氏と「阿部俊彦研究室」のゼミ生（4名）に出演してもらった。

今回の調査活動は、彦根銀座商店街の方々を中心に、マルビシ百貨店の関係者（創業者、出店者、従業員、利用者）とその親族など34名と、

専門家や学生の視点として、田邊寛子氏と阿部俊彦氏と「阿部俊彦研究室」のゼミ生（4名）の、合計40名を対象にインタビューを実施した。その概要をまとめたものが【表5】である。

表5 取材概要一覧

No.	名前・お立場	年齢	実施日	取材概要
1	小島充子氏 コジマギャラリー オーナー	67歳	2021年8月27日 2021年8月30日 2021年8月31日 2021年9月1日 2021年9月19日 2021年9月20日 2021年10月16日 2021年10月17日 2021年10月18日 2021年11月14日	「マルビシ百貨店の映像作品制作プロジェクト」の発起人であり彦根銀座商業協同組合の役員をされている小島充子氏を取材した。インタビューでは、小島充子氏が「ひこね文芸 第28号」に寄稿された随筆「マルビシの想い出」について、マルビシ百貨店の建物が解体されるときの切ない思いや、マルビシ百貨店の創業者メンバーである小島卯三郎氏（お祖父様）の思い出について語ってくださいました。 資料として、マルビシ百貨店の建設に至る経緯が収録された小島昭治氏（父親）の生前の音声データ、同氏の生前の写真、戦前のマルビシ百貨店の店内の写真、ご自身で撮影された解体当時の画像などを複写させていただいた。また、この商店街の方々へのインタビューには、全てにご協力いただいた。
2	大塚春彦氏 株式会社パリヤ 常務取締役	65歳	2021年8月27日	「株式会社パリヤ」の常務取締役である大塚春彦氏を取材した。インタビューでは、昭和43年にマルビシ百貨店を買収した後に、「株式会社パリヤ」としてオープンするための改装工事や、「レストラン輪ごん」開店の経緯について語ってくださいました。資料として、開店当時の写真や社史を複写させていただいた。
3	宮下泰彦氏 釘平金物店	70代 前半	2021年8月30日 2021年10月16日	マルビシ百貨店のお隣で代々続く「釘平金物店」のオーナーである宮下泰彦氏を取材した。インタビューでは、解体当時に工事業者との間でトラブルがあったことや、子供時代の思い出として、「スター食堂」のランチについて語ってくださいました。また、映像『マルビシ百貨店の建設から』（No.19のインタビュー概要を参照）を模した再現映像を撮影する際、ロケ地として屋上を使わせていただいた。
4	安田文子氏 有限会社ミツワ食堂	90歳	2021年8月30日	この商店街で「ミツワ食堂」をされている安田文子氏を取材した。インタビューでは、ご自分が戦後のマルビシ百貨店のスター食堂で結婚披露宴をされたことについて語ってくださいました。資料として、この結婚披露宴の写真を複写させていただいた。
5	渋谷博氏 シブヤ写真館	89歳	2021年8月30日	長年、地元の写真館のカメラマンとして撮影されてきた「シブヤ写真館」渋谷博氏を取材した。インタビューでは、渋谷博氏が撮影した貴重な写真を見せていただきながら、戦後のマルビシ百貨店が華やかだった昭和30年代から解体されるまでの思い出について語ってくださいました。資料として、戦後のマルビシ百貨店の屋上に鶴がいたことを示す写真や、解体直前のマルビシ百貨店の建物を撮影した写真を複写させていただいた。渋谷博氏が撮影した昭和30年代のマルビシ百貨店の写真の多くは、彦根市文化財課に寄贈されていた。（No.16のインタビュー概要を参照）
6	阿部俊彦氏 立命館大学理工学部 建築都市デザイン学科 (准教授)		2021年8月31日	令和2年（2020年）から「彦根銀座商店街の防火建築帯の活用とそれによる街づくり」に取り組んでいる阿部俊彦氏を取材した。インタビューでは、阿部俊彦氏のこの商店街での活動や、これまでの活動について教えていただいた。また、本プロジェクトの趣旨を説明させていただき、映像『マルビシ百貨店の建設から』（No.19のインタビュー概要を参照）の開店当時の様子を現在の風景で再現するシーンの撮影に、阿部俊彦氏のゼミ生（4名）とともに出演していただいた。

7	冨村郁斗氏 阿部研究室 (修士1年生)		2021年8月31日	「彦根銀座商店街の防火建築帯の活用とそれによる街づくり」に取り組んでいる「立命館大学 阿部俊彦研究室」のゼミ生(4名)を取材した。インタビューでは、この商店街で活動する学生の視点から、戦前・戦後の「マルビシ百貨店」がこの商店街のシンボルであった時代と現在の様子を比較して、今後の課題や未来への展望について語ってもらった。また、本プロジェクトの趣旨を阿部俊彦氏を通じて説明していただき、映像『マルビシ百貨店の建設から』(No.19のインタビュー概要を参照)の開店当時の様子を現在の風景で再現するシーンの撮影に、阿部俊彦氏とともに出演していただいた。
8	傍島 靖葉氏 阿部研究室 (修士1年生)		2021年8月31日	
9	比果未穂子氏 阿部研究室 (4年生)		2021年8月31日	
10	木下杏梨氏 阿部研究室 (4年生)		2021年8月31日	
11	田邊寛子氏 有限会社田辺コンサルタント・グループ まちひとこと総合計画室 取締役副社長		2021年8月31日	平成26年(2014年)からこの商店街のサポートをしている田邊寛子氏を取材した。インタビューでは、映像『マルビシ百貨店の建設から』(No.19のインタビュー概要を参照)を見ながら、この商店街が再生に向かう道を、コンサルタントの視点から語ってくださいました。
12	堀部滋子氏 堀部時計店(閉店)	87歳	2021年8月31日 2021年9月1日 2021年9月19日 2021年10月17日	義理の父親がマルビシ百貨店の創業者メンバーである堀部滋子氏を取材した。インタビューでは、戦後のマルビシ百貨店の代表取締役であった義理の父親の秘蔵のメモを読んでいただきながら、「軍需工場」時代から「満連百貨店」時代を経て、戦後のマルビシ百貨店が再開するまでの詳細な経緯を聞かせていただいた。また、ご自身が名古屋から嫁がれた際に「マルビシ百貨店」の「スター食堂」で披露宴をされたときの思い出も語ってくださいました。資料として、秘蔵のメモと結婚披露宴の写真を複写させていただいた。
13	宮本年博氏 高嶋屋ビル オーナー	69歳	2021年9月1日	マルビシ百貨店の創業者メンバーで、初代代表取締役の宮本寿太郎氏のお孫さんである宮本年博氏を取材した。映像『マルビシ百貨店の建設から』(No.19のインタビュー概要を参照)を見ながら、宮本寿太郎氏のお人柄や、子供時代の思い出について語って頂いた。また、パリヤの改修工事の際、当時「株式会社YKK」の社員としてサッシを納品されており、工事を請け負った田付工務店に「マルビシ百貨店の図面」を提供したがその後紛失してしまったエピソードを語ってくださいました。
14	平井圭子氏 父親が京都の「スター食堂」の社員をされていた	88歳	2021年9月1日	父親が京都の「スター食堂」の社員をされていた平井圭子氏を取材した。インタビューでは、京都の「スター食堂」がマルビシ百貨店に出店した経緯について語ってくださいました。資料として「昭和30年2月21日開店 スター食堂彦根設置記念品(アルバム)」から画像を複写させていただいた。
15	佐渡一清氏 金美堂 店主	71歳	2021年9月1日	この商店街で「金美堂」の店主をされている佐渡一清氏を取材した。資料として、マルビシ百貨店(大名行列)の様子を撮影したカラー写真と、「保存版 湖東の今昔」より画像を複写させていただいた。
16	斎藤一真氏 彦根市文化財課 (学芸員)		2021年9月2日	彦根市文化財課の学芸員である斎藤一真氏に研究の協力を依頼して、渋谷博氏から寄贈された画像(No.5のインタビュー概要を参照)を閲覧させていただき、その経緯について教えていただいた。研究資料として、マルビシ百貨店の画像や「ゑびす講」の歩行者天国の画像を複写させていただいた。
17	廣田精佑氏 喫茶紅屋(ベニヤ) 店主	83歳	2021年9月19日 2021年9月20日	父親がマルビシ百貨店の創業者メンバーである廣田精佑氏を取材した。インタビューでは、マルビシ百貨店が建設される以前は、その土地で父親が「紅屋洋品店」をされていたことを教えてくださいました。資料として、「紅屋洋品店」のお写真を複写させていただいた。また、喫茶紅屋(ベニヤ)でクリームソーダを飲むシーンの撮影のロケ地としてご協力いただいた。
18	井上一氏 季節のお菓子おやつ gatto 井上あさひ氏	43歳 4歳	2021年9月20日	彦根銀座商業協同組合の役員をされている井上一氏を取材した。インタビューでは、マルビシ百貨店が解体された時の思い出や、現在の商店街の状況について語ってくださいました。また、喫茶紅屋(ベニヤ)で、井上一氏の娘さんがクリームソーダを飲む様子も撮影させていただいた。

19	藤田益平氏 有限会社いと重菓舗 会長	85歳	2021年9月20日	父親がマルビシ百貨店の創業者メンバーで、「有限会社 いと重菓舗」の会長をされている藤田益平氏を取材した。 インタビューでは、小島充子氏から提供された映像『マルビシ百貨店の建設から』は、藤田益平氏の父親が、昭和8年にフィルムムービーカメラで撮影したものを近年に息子がDVD化したものであることがわかった。また、戦前のマルビシに洋菓子店を出店していたことや、戦時中の軍需工場に父親が工場長として勤めていたことなどを語ってくださいました。
20	田中和之氏 元果物店店主 ダンボールアーティ スト	68歳	2021年10月16日	マルビシ百貨店の向かいで果物店をされていた田中和之氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供時代の思い出を中心に、戦後のマルビシ百貨店の屋上の滑り台で遊んだ記憶や、「スター食堂」や「レストラン輪ごん」で食事をしたエピソードを語ってくださいました。
21	安居輝人氏 トラヤ商事株 専務 安井虎政氏（息子）	44歳 4歳	2021年10月16日	彦根銀座商店街で代々続くトラヤ商事の3代目である安居輝人氏を取材した。インタビューでは、マルビシ百貨店の記憶はほとんどなく、子供時代の思い出も「スター食堂」よりも「グリルフレーバー」のハンバーグのほうが記憶に残っていることや、解体時に商店街中にネズミがはしったと親から聞かされた話を語ってくださいました。また、「グリルフレーバー」で、安居輝人氏の息子がクリームソーダを飲む様子も撮影させていただいた。
22	馬場美智子氏 グリルフレーバー銀 座本店	91歳	2021年10月16日	亡くなられたご主人が、戦後のマルビシ百貨店に出店していた「スター食堂」の元従業員である馬場美智子氏を取材した。インタビューでは、「スター食堂」が戦後のマルビシ百貨店から撤退したあと、ご主人とともにこの商店街で「グリルフレーバー」を開店されたころのお話や、ご結婚される前は京都で教師をされていたことや、一時期、彦根市立城東小学校（滋賀県彦根市京町2丁目2-19）の非常勤をされた際に、生徒から「ハンバーグのおばちゃんや」と言われた思い出を語ってくださいました。
23	藤塚利雄氏 ヘアーサロンフジツ カ	86歳	2021年10月17日 2021年11月14日	この商店街で代々続く理髪店「ヘアーサロンフジツカ」の藤塚利雄氏を取材した。インタビューでは、ご自身がマルビシとほぼ同い年であることから、戦前、戦中、戦後のマルビシ百貨店について、それぞれの時代の思い出を語ってくださいました。「ヘアーサロンフジツカ」の置き時計は、昭和20年（1945）8月17日に火災の延焼を防ぐために取り壊される予定だった当時のお店にあったもので、8月15日に終戦したことで現在も使われている話が印象深く、後日、置き時計を追加撮影させていただいた。
24	藤塚慎也氏 ヘアーサロンフジツ カ	52歳	2021年10月17日 2021年11月14日	「ヘアーサロンフジツカ」の藤塚利雄氏の息子である藤塚慎也氏を取材した。子供のころから商店街のシンボルだったマルビシ百貨店が解体していくときの切ない思い出を語ってくださいました。資料として、解体の様子を撮影した動画や画像を複写させていただいた。
25	前野巳樹夫氏 ふたば園茶舗	68歳	2021年10月17日	マルビシ百貨店の向かいの「ふたば園茶舗」の野巳樹夫氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供時代の思い出を中心に、戦後のマルビシ百貨店の屋上の遊園地、ダンスホール、の思い出から、特に「スター食堂」のドーナツマシーンについて語ってくださいました。資料として、屋上遊園地の滑り台で遊ぶご自身の子供の頃の写真を複写させていただいた。
26	若林信宏氏 ワインセラー銀座ヤ マガタヤ	64歳	2021年10月17日	この商店街の酒店「ワインセラー銀座 ヤマガタヤ」の若林信宏氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に、マルビシ百貨店の階段がベルサイユ宮殿みたいだった記憶や、戦後のマルビシ百貨店が閉店してからパリヤになるまでの廃墟と化したマルビシに忍び込んだ思い出を語ってくださいました。
27	野村善一氏 ノムラ文具店（閉店）	92歳	2021年10月17日	マルビシ百貨店の創業者メンバーの息子である野村善一氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に戦前のマルビシ百貨店の大きな階段で滑って遊んだ思い出を語ってくださいました。資料として、ご自身で撮影と編集をされた「彦根銀座商店街」（DVD）や、開店当時のマルビシ百貨店の写真、定款、図面など貴重な資料を複写させていただいた。
28	安食純子氏 Jam マリケ	69歳	2021年10月18日	この商店街で「Jam マリケ」（婦人服店）をされている安食純子氏を取材した。インタビューでは、ご自分が子供の頃に戦後のマルビシ百貨店の屋上の滑り台で遊んだ思い出について語ってくださいました。

29	川口松男氏 みくちやギンザ	81歳	2021年10月18日	この商店街で「みくちやギンザ」(玩具店)をされている川口松男氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出として、「滅多に外食などできなかった時代のスター食堂の記憶」や、「高い建物がなかつた頃の屋上からの眺め」など、その存在は「現在の通天閣やスカイツリーみたいなもの」だったと語ってくださいました。
30	安澤大輔氏 くらがりや 安澤種苗店	76歳	2021年10月18日	この商店街で「くらがりや安澤種苗店」(園芸販売)をされている安澤大輔氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に、1階から3階の「スター食堂」に通ずる外付け階段の記憶や、「レストラン輪ごん」で「父親に、お肉を食べさせてもらった」思い出を語ってくださいました。
31	近藤嘉男氏 有限会社丁子屋薬局	69歳	2021年10月18日	この商店街で「有限会社 丁子屋薬局」を経営している近藤嘉男氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に「スター食堂」のお子様ランチの思い出を語ってくださいました。
32	小林昭一氏 有限会社太田書店 代表取締役	68歳	2021年10月18日	この商店街で「有限会社 太田書店」をされている小林昭一氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に、屋上で遊んだ記憶や「スター食堂」のハンバーグ(お子様ランチ)について語ってくださいました。資料として、先代の遺品から開店当初の「パリヤ」の写真が出てきたので、ご提供いただいた。
33	田村守氏 タムラ洋品店(閉店)	81歳	2021年10月18日	この商店街で「タムラ洋品店」をされていた田村守氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に、子供歌舞伎の練習をマルビシ百貨店したことや、「スター食堂」の思い出や、ダンスホールについて聞いた話として「当時は何組も結ばれたカップルがいた」という貴重なエピソードを語ってくださいました。
34	中村メイ子氏 元パリヤの従業員 恵弘(えいこう) 時計宝石店	66歳	2021年10月18日	元パリヤの従業員として中村メイ子氏を取材した。インタビューでは、マルビシ百貨店の屋上にコンコンさん(お稲荷さん)が祀ってあったことや、ワコールの担当だった時代に3階で催事をおこなった際の思い出を語ってくださいました。資料としてワコールの担当だった時代のご自身の画像を複写させていただいた。
35	田部美枝子氏 モクモク(Moku Moku)自然食カフェ	75歳	2021年10月18日	「モクモク (Moku Moku) 自然食カフェ」の田部美枝子氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出を中心に、マルビシ百貨店のドーナツマシーンの思い出や、当時珍しかった水洗トイレの記憶について語ってくださいました。
36	小島聖巳氏 一般社団法人近江ツーリズムボード	30歳	2021年10月18日	小島充子氏の娘さんとして、この商店街で育った小島聖巳氏を取材した。インタビューでは、ご自分が小学校の卒業式のあとに「ザ・ダイソーワーノンPLAZA彦根銀座店」([表5]の⑦を参照)で、友人たちとプリクラを撮影したときの思い出を、当時のプリクラが貼られた手帳を見ながら語ってくださいました。
37	岩根順子氏 サンライズ出版株式会社 代表取締役	76歳 or 77歳	2021年10月19日	「サンライズ出版株式会社」の代表取締役の岩根順子氏を取材した。インタビューでは、岩根順子氏の父親で、「サンライズ出版株式会社」の初代である岩根豊秀氏が、戦前のマルビシ百貨店の文具部(野村文具店)の一角に謄写版と活版のお店を出店していたお話や、先代が商店街のイベントのチラシをデザインするなどアイデアマンとして活躍されてたお話を語ってくださいました。資料として、当時、先代が作成したチラシやポスターの画像データや、「月刊ひこね2004年No.2 7月号」に、ご自身が寄稿されたエッセイ「彦根銀座西口角(2)」において「スター食堂」が導入したドーナツマシーンに関する記事を複写させていただいた。
38	岡林壽子氏 ごはんカフェ小さな銀座	72歳	2021年10月19日	マルビシ百貨店の創業者メンバーで、初代代表取締役の宮本寿太郎氏のお孫さんで、宮本正博氏のお姉様の岡林壽子氏を取材した。インタビューでは、お婆さまや、お母様から聞いた宮本寿太郎氏のお人柄について貴重なエピソードを語ってくださいました。
39	山田晴紀氏 八百留商店	55歳	2021年10月19日	マルビシ百貨店の向かいで、代々「八百留商店」(青果店)の山田晴紀氏を取材した。インタビューでは、ご自分が小学生の頃に3階まで続く階段を登って「スター食堂」や「レストラン輪ごん」に野菜を配達していた思い出を語ってくださいました。

40	正木嘉規氏 有限会社正木商店 代表取締役	81歳	2021年10月19日	この商店街で「有限会社正木商店」の代表取締役をされている正木嘉規氏を取材した。インタビューでは、ご自身の子供の頃の思い出として「スター食堂」のランチを食べた記憶や、ご自身が大学生の頃にダンスホールで流行していた音楽やダンスについて語ってくださいました。
----	----------------------------	-----	-------------	--

3.3 調査活動のまとめ

今回の調査活動でマルビシ百貨店に関する正確な歴史年表の作成には至らなかったが、映像作品の素材としては概ねその成果を得ることができた。それは、歴史的な事実を明らかにするよりも、インタビュー対象者の記憶の中のマルビシ百貨店に魅力を感じたからだ。

[表4] の時代区分と [表5] で得た情報や資料を照らし合わせると、まず、戦前のマルビシ百貨店のモダンで華やかな印象が、この地域のシンボルとしての原型を作っていることが確認できる。そのシンボルとしての印象は、インタビュー対象者の年齢に比例して、高齢の方であるほど鮮明で、若い方であるほど薄れてゆくことが確認できた。

その一方で、実際にマルビシ百貨店として営業していた時期は、戦前と戦後をあわせても、おそらく20年にも満たないと思われるが、当時を知る方の記憶も曖昧であったり、当時を知らない方であっても、どこかで聞いた記憶が事実と入り混じることで、戦前と戦後のマルビシ百貨店の記憶が混ざったり、あるいは、「スター食堂」と「レストラン輪ごん」の記憶が入り混じったりしながら、マルビシ百貨店はインタビュー対象者の記憶の中に混沌とした状態で存在していた。

また、マルビシ百貨店の華やかな記憶に対して、時代区分の移行期と思われる時期の記憶として「閨市同然の様相となった」、「老朽化して雨漏れが酷かった」、「解体の際にネズミがはしった」など、ネガティブな記憶を確認することができた。これは、マルビシ百貨店が繁栄と衰退を繰り返しながら徐々に老朽化していくことを物語っている。

4. 映像作品《記憶の年縞—彦根銀座マルビシの想いで—》

4.1 作品の構想

調査活動で収集した情報や資料を時系列に整理していると、まるで記憶の地層を発掘調査しているような感覚を得るとともに、マルビシ百貨店という存在には、戦前と戦後の華やかな思い出ばかりではなく、戦中から戦後の混乱期や廃墟として放置された時期を含む混沌とした存在に魅力があると感じた。

そこで、マルビシ百貨店の混沌から、その「繁栄と衰退」、「光と影」、「凸と凹」といった関係を、現代アートの視点から広義の彫刻

として捉える作品の構想へとつながった。

映像作品は、『記憶の年縞－彦根銀座マルビシの想いで－』と題して、インタビューから抽出されたエピソードを時系列につなぎながら、当時を示す映像や画像などを同時に見られるように、主に画面を2つに分割した構成で編集している。最後に、マルビシ百貨店この商店街のこれからを表現するものとして、この地域に関する専門家や学生の視点を追加して作品の結びとした。

4.2 作品の内容

今回の映像作品『記憶の年縞－彦根銀座マルビシの想いで－』(35分24秒)は、インタビュー動画と収集した映像や画像などの資料を素材に、時系列を軸に大きく8つのチャプターで構成した[表6]。以下、各チャプターの内容について、収録時間と項目と画像を記す。

表6

【8つのチャプター】

- ①イントロ
- ②戦前のマルビシ百貨店
- ③戦中・戦後の混乱期
- ④戦後のマルビシ百貨店
- ⑤マルビシ百貨店からパリヤへ
- ⑥パリヤ、平和堂、ダイソー、そして解体へ
- ⑦未来への取り組み
- ⑧エンディング

①イントロ (00:00 - 00:39)

- ・マルビシ百貨店跡地 [図7]
- ・クリームソーダと記憶のイメージ [図8]
- ・タイトル『記憶の年縞－彦根銀座マルビシの想いで－』 [図9]



図7 マルビシ百貨店跡地の映像



図8 駐車場にクリームソーダの画像を合わせ、記憶の地層を掘り下げるイメージを表現
※かつてこの地で洋品店を営んでいた紅屋（現在は喫茶店）のクリームソーダを撮影

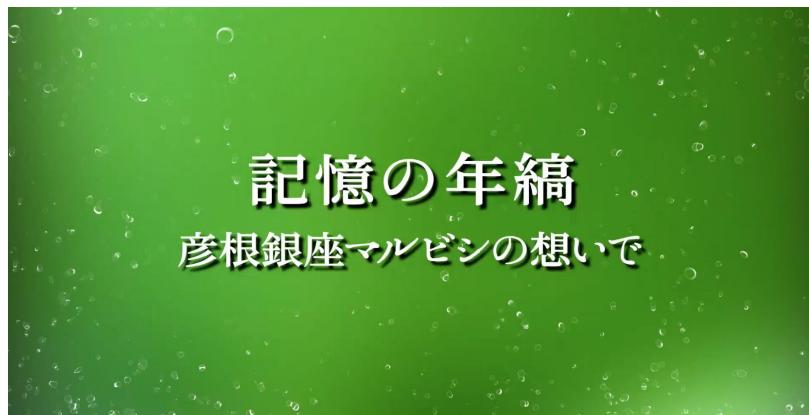


図9 クリームソーダの泡が弾けてタイトルが表記される。

②戦前のマルビシ百貨店 (00:39 - 07:39)

- ・百貨店への想いを語る [図 10]
- ・創業者メンバー [図 11]
- ・マルビシ百貨店建設の経緯と様子 [図 12]
- ・地域の芸術・文化を牽引 [図 13]



図10 解体されたマルビシ百貨店への想いを語る小島充子氏



図11 創業者メンバー



図12 マルビシ百貨店建設の様子を撮影した父親について語る藤田益平氏



図13 戦前のマルビシは、地域の芸術・文化を牽引する存在だったと語る岩根順子氏

③戦中・戦後の混乱期 (07:39 - 13:52)

- ・戦時中のエピソード [図14]
- ・満州の引揚者による満連百貨店時代
- ・満連百貨店からマルビシ百貨店の再開へ [図15]



図 14 戦時中のエピソードを語る藤塚利雄氏

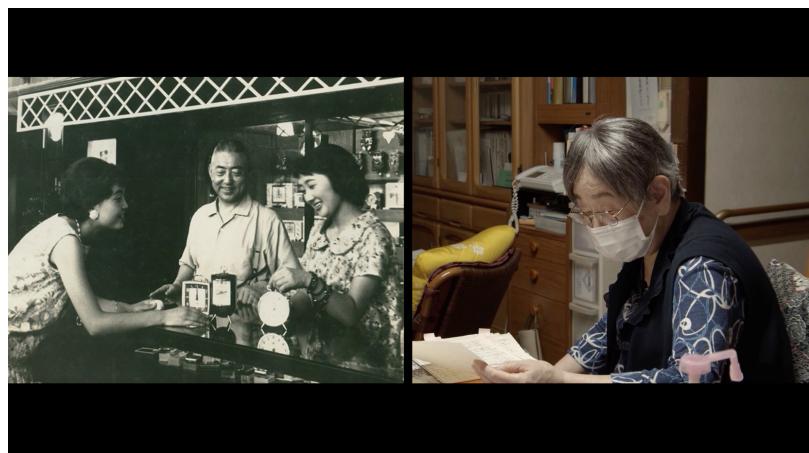


図 15 満連百貨店からマルビシ百貨店再開のエピソードについて、先代のメモを読み上げる堀部滋子氏

④戦後のマルビシ百貨店 (13:52 - 24:53)

- ・マルビシ百貨店再開
- ・屋上のエピソード [図 16]
- ・ツルツル滑る階段 [図 17]
- ・クルクル回る滑り台 [図 18]
- ・長い長い階段
- ・ダンスホール [図 19]
- ・スター食堂で披露宴 [図 20]
- ・スター食堂出店の経緯 [図 21]
- ・スター食堂のメニュー [図 22]
- ・ドーナツマシーン
- ・スター食堂とフレーバー

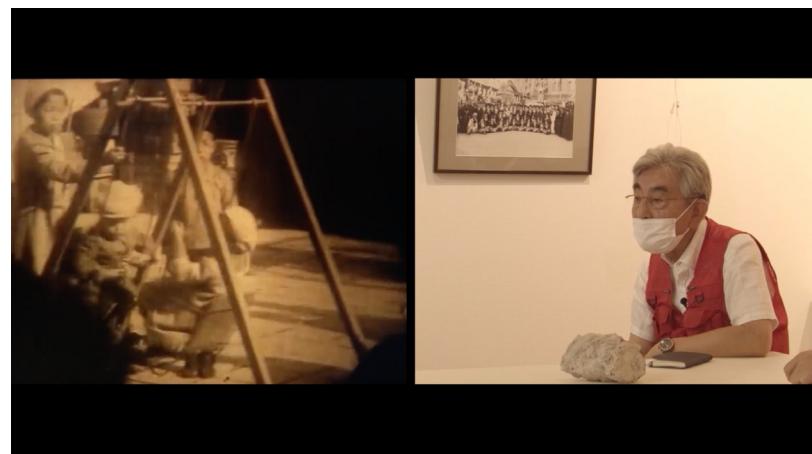


図 16 屋上で遊んだ子供時代のエピソードを語る宮本年博氏



図 17 ツルツルの階段を滑って遊んだ想いでを語る野村善一氏



図 18 クルクル回る滑り台で遊んだ想いでを語る前野巳樹夫氏



図19 ロマンチックなダンスホールのエピソードを語る田村守氏



図20 スターレストランでの披露宴の想いでを語る安田文子氏



図21 京都のスター食堂出店の経緯を語る平井圭子氏

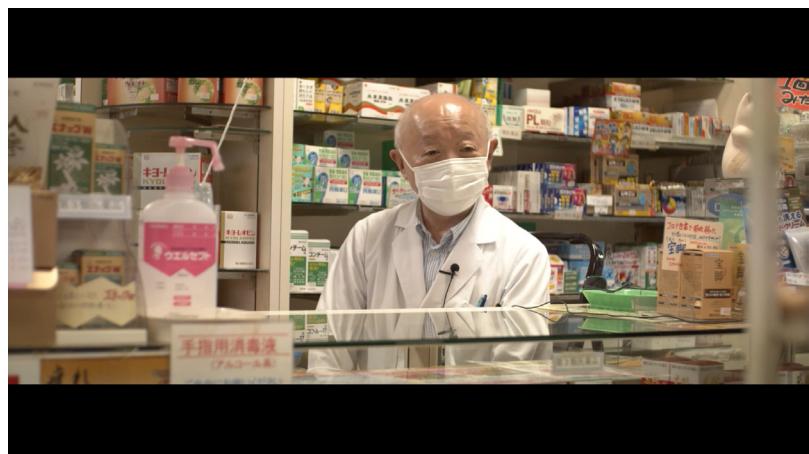


図 22 スター食堂のお子様ランチの想い出を語る近藤嘉男氏

⑤マルビシ百貨店からパリヤへ (24:53 - 28:08)

- ・パリヤのリニューアルオープン [図 23]
- ・レストラン輪ごんの想いで
- ・元パリヤの従業員さんの証言
- ・フレーバーの想いで



図 23 パリヤの開店当初の写真を、父親の遺品整理で見つけたと語る小林昭一氏

⑥パリヤ、平和堂、ダイソー、そして解体へ (28:08 - 30:35)

- ・廃墟としてのマルビシ
- ・廃墟としてのマルビシダイソーでプリクラ撮影 [図 24]
- ・解体当時の想いで [図 25]

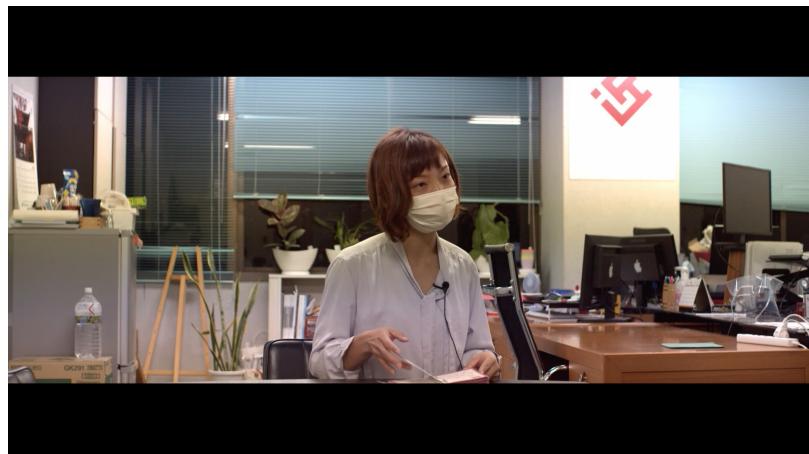


図 24 小学校の卒業式のあと、友達とプリクラ撮影をした想いでを語る小島聖巳氏



図 25 解体の様子を撮影した時のことを話す藤塚慎也氏

⑦未来への取り組み (30:35 - 35:00)

- ・建設当時の再現映像
- ・立命館大学（阿部ゼミ）の学生コメント [図 26]
- ・地域コンサルタント田邊寛子氏の視点 [図 27]



図 26 立命館大学（阿部ゼミ）の皆さんで、開店当初の映像を再現



図 27 地域コンサルタントの視点から商店街について語る田邊寛子氏

⑧エンディング (35:00 - 35:24)

- ・彦根銀座商店街の子供たちの映像 [図 28]
- ・エンドロール



図 28 彦根銀座商店街の子供の映像
※フレーバーでクリームソーダを飲む様子

5. 作品上映会とアンケート調査

5.1 上映会の実施概要

制作した作品に対する地域の皆さんからの意見を伺うために、毎年 11 月の商店街恒例行事である「ゑびす講」に合わせて商店街内で上映会を行いアンケートを取った [図 29]。アンケート調査の目的は、映像作品を通じてマルビシ百貨店に関してどのような記憶を思い出し、感想をもったのかを確認することである。アンケートでは、①性別、②年齢、③居住地、④来場のきっかけ（複数回答可）、⑤上映会の満足度（5 段階評価）、⑥マルビシ百貨店を知っていたかどうか、⑦マルビシ百貨店に関する思い出と、当時の資料や写真等の有無（自由記述）⑧その他商店街やゑびす講に対する感想など（自由記述）



図 29 上映会場の様子

述)、について調査した。

上映会は、ゑびす講の期間である 11 月 20 日から 23 日の 4 日間、彦根銀座商店街に位置する「コジマギャラリー」をお借りし、35 分の映像作品を一日中連続再生するかたちでおこなった。会場入り口には鑑賞者数を数えるカウンターも設置し、鑑賞後に任意でアンケートに回答いただくかたちで鑑賞者からの意見を収集した。その結果、4 日間で 402 名の方に鑑賞していただき、246 件（来場者数の 61.19%）のアンケートを回収することができた [表 30]。

表 30 上映会の実施内容

上映会の開催日	2021 年 11 月 20 日（土）～11 月 23 日（火・祝）10 時～17 時
上映会の会場	コジマギャラリー（彦根市銀座町 28）
上映会の実施方法	上記の日時と場所にて、35 分の映像作品をループ再生することで、開催期間中は何度でも無料で鑑賞していただける形で上映会を実施した。
鑑賞者数	402 名
アンケート回収	246 件（来場者数の 61.19%）

実際に上映会を実施したことで、次回に向けて改善すべき課題がいくつか明らかになったことも記す。まず、ゑびす講という一年で最も商店街に人が集まる賑やかなイベントと合わせて実施したため、当日は映像作品の音声が聞き取りづらい状況が発生していた。今後、一般にみていただく際には字幕の検討も必要であることが明らかになった。また、上映開始時間と作品の長さをあらかじめアナウンスしていなかったことから、次の予定の関係で最後まで鑑賞できない状況が発生してしまった。

以上の課題をふまえて、鑑賞者の状況を整えていくことで、作品に対してより深く向き合える状況を作ることで、作品を通じて地域資源が鑑賞者や地域に及ぼす影響力を高めていくことができるを考える。

5.2 アンケートの分析内容

アンケートの結果 [表 31]、今回は男女から半数ずつ回答が得られた。また、回答者の過半数が六十歳代から七十歳代の方々だった。

来場のきっかけが「ゑびす講」であると回答した方が 36.62% だった。しかし、「チラシ」、「知人」「SNS」、「ホームページ」と回答した方の合計は 55.42% と過半数をこえており、チラシや知人からの呼びかけ等で本作品を知り足を運んでくださった方々が多くいらっしゃったことがわかる。また、来場のきっかけが「その他」の 20 名のうち、17 名の方が新聞を見て足を運んだと回答なさっていた。これは、ゑびす講期間中の 11 月 22 日の『中日新聞』紙の朝刊で、本上映会を記事に取り上げてくださったことによるものと考えられる [註 6]。そして、マルビシ百貨店を知っているかどうかの設問に

対し、77.53%の方が「知っていた」と回答なさっていた。これらのことから、今回の鑑賞者の過半数が、本映像作品で題材にしたマルビシ百貨店の過去の映像を見ることを目的に、足を運んでいたことが分かった。

表31 対象者の属性と感想に関する基本統計

項目		N	割合
①性別	女性	131	49.06%
	男性	131	49.06%
	未回答	5	1.87%
②年齢	10代	4	1.50%
	20代	13	4.87%
	30代	14	5.24%
	40代	19	7.12%
	50代	37	13.86%
	60代	89	33.33%
	70代	61	22.85%
	80代	28	10.49%
	未回答	2	0.75%
③居住地	彦根市	237	88.76%
	滋賀県内 (彦根市除く)	19	7.12%
	その他	10	3.75%
	未回答	1	0.37%
④来場のきっかけ (複数回答可)	ゑびす講	104	36.62%
	チラシ	98	34.51%
	知人	44	15.49%
	SNS	10	3.52%
	ホームページ	2	0.70%
	その他	20	7.04%
	未回答	6	2.11%
⑤上映会の満足度	5（良い）	92	34.46%
	4	36	13.48%
	3	63	23.60%
	2	13	4.87%
	1（悪い）	2	0.75%
	未回答	61	22.85%
⑥マルビシ百貨店を知っていたかどうか	知っていた	207	77.53%
	知らなかった	55	20.60%
	未回答	5	1.87%

アンケート後半の2つの自由記述では、⑦マルビシ百貨店に関する思い出と、当時の資料や写真等の有無については、83名から回答があり、⑧その他商店街やゑびす講に対する感想などでは、89名から回答が得られた。

マルビシ百貨店に関する思い出は、外観や内装などの建物に関する視覚的な思い出や印象よりも、食事に関する味覚的思い出が強い傾向がある。記述内容を見ると、「マルビシの中にスター食堂があり、

家族で食事に行った覚えがあります。外食するというのがとても嬉しかった」(60代女性) のように、かつてマルビシ百貨店にあった「スター食堂」に関する記述が 20 件、「最上階の輪ごんでステーキを親に連れて行ってもらって食べるのが楽しみでした」(50代男性) といった「輪ごん (レストラン)」に関する記述が 15 件、「マルビシの当初 2 階でコーヒーをいただいたのを思い出します。映画なども上映されていましたよね」(80代女性) といった食事に関する思い出の記述が多数あった。このことより、映像を通じてマルビシ百貨店の思い出を振り返った多くの人が、百貨店の思い出が「食事」に関するエピソードと強く関連していることがうかがえる。

⑤上映会の満足度を、⑥マルビシ百貨店を知っていたかどうかの結果でクロス集計を行った [図 32]。その結果、百貨店を知っていた人の 50.73% がイベントへの満足度に対して 4 以上の高い評価をつけた。しかし、百貨店を知らなかった人の 30.91% がイベントへの評価に回答しなかったことから、映像作品に対して良し悪しの判断がつけられなかつたことがうかがえる。これは、作品の構想として、多様な価値観を持つ人たちにマルビシ百貨店をいい思い出だけを紹介するのではなく、中立的に作品制作することで、多面的な見方を提供する意図が反映された結果だと推察する。

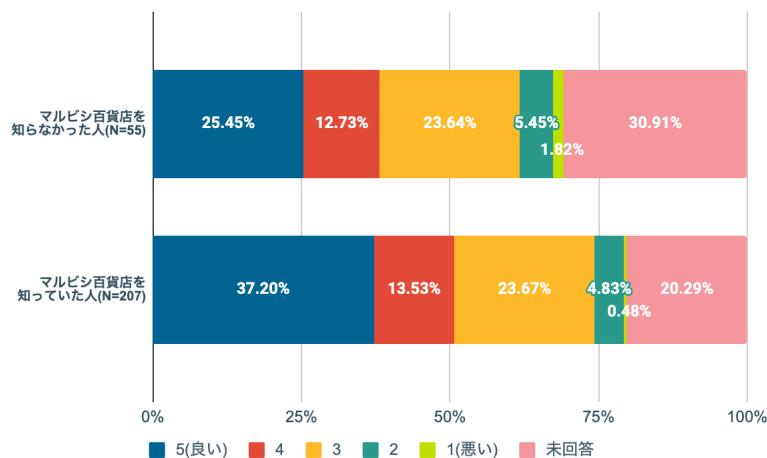


表32 上映会の満足度とマルビシ百貨店を知っていたかどうかのクロス集計

6. おわりに

本プロジェクトでは、現代アートの視点からマルビシ百貨店という解体されて現存しない地域資源を活用し、調査活動を通じて記憶の地層の発掘調査を重ね、映像作品制作によってそれを昇華させ、上映会・アンケート分析を通じて新たな地域資源として還元させるサイクルを現代アートの可能性として実践した。

本プロジェクトでは、様々な方に協力していただき、マルビシ百貨店に関する多くの一次資料を収集することができたが、今回はまだ一部しか作品としていかすことができておらず、今後も残りの一次資料を活用したアートプロジェクトに取り組んでいく必要があると考えている。

今回のアートプロジェクトを通じて得られた、地域資源を活用した現代アートの可能性に関する洞察は以下の3点があげられる。

①このアートプロジェクトは、多様な人々を巻き込み受け入れられる「器」としての役割と可能性を發揮していた。それは、40名のインタビューや地域の課題と向き合う専門家や学生との連携が示すおり、現代アートには世代や立場を越えた出会いと、世代や立場による異なる視点を「混沌」のまま受け入れができる器として機能した。

②現代アートの視点からマルビシ百貨店を捉えることで、繁栄と衰退の良し悪しではなく、多面的な価値を「混沌」のまま表現することに努めた。その結果、マルビシ百貨店の歴史を振り返る際に、廃墟のようなネガティブな記憶にも、古き良き思い出というポジティブな記憶にも寄りすぎない、中立的な視点から鑑賞してもらうことができた。それは、複雑な事情も含め地域資源であることを示唆していく情報伝達新しい可能性ではないだろうか。

③彦根城のような現存するものだけが地域資源ではなく、マルビシ百貨店というすでに解体撤去された存在でも、その記憶や記録に着目することで、新たな地域資源としての可能性をアートによって切り開くことができたのではないだろうか。それは、商店街の一角での上映会を通じて、新聞でも取り上げていただき、また商店街や地域住民など多くの方々から反響をいただいたことで、この地域の新しいまちづくりにつながる新たな地域資源としてマルビシ百貨店と現代アートが役立てる可能性も示している。

今後の展開として、今回の映像作品をインターネット上で公開するショート版（字幕付き）の制作や、ターゲット層を絞り込んだ対話型鑑賞会やワークショップで活用するなど、地域の活性化に向けた多様な可能性についても実践的に検証していこうとしている。このような活動を継続させることで、地域と現代アートが双方の質向上させる関係を構築し、地域と関わる現代アートの可能性として、次回につなげたいと思う。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたり、作品制作のきっかけとなった動画資料の提供から、調査活動や上映会などサポートしていただきました小島充子氏をはじめ、取材にご協力いただいた全ての方々にこの場を借りて感謝の意を表します。

- [註 1] 2007 年 6 月施行の「地域資源法（中小企業地域産業資源活用推進法）」での「地域資源」とは、地域ならではのリソースを活用した新たな商品・サービスを開発することで、取引や雇用を拡大し、地域経済を活性化する「産業資源」として定義されている。中小企業庁.“地域資源とは？”. 中小企業庁「ミラサポ plus」. 2020-4-1. <https://mirasapo-plus.go.jp/hint/1938/>, (参照 2022-1-14)
- [註 2] 『豪と瘤』は、昭和 20 年代に彦根市が取り組んだマラリア対策を記録した教育映画『翼もつ熱病』（彦根市図書館蔵）をテーマに、宇野が映画に登場する当時の風景と同じ場所を撮影した映像や、当時を記憶する地域住民やマラリアの専門家などのインタビューを撮影して、この映画と同じ構成で編集したものを、二画面で同時に鑑賞する映像インスタレーションとして発表したものである。
- [註 3] 参照文献 [1] によれば、「当時、私が生まれ育った近隣の彦根のまちには、金融恐慌が吹き荒れていた昭和六年に、都会からの資本の参入に危機感を感じた地元の有力商店主によって建設されたマルビシ百貨店があり、商店街の中心となっていました。」と記されている。
- [註 4] 参照文献 [2] によれば、「1933 年 10 月 1 日に開店したマルビシ百貨店（彦根市立図書館提供）」と記されている。
- [註 5] パリヤは、昭和 27 年に婦人服の生地専門店として創業し、昭和 31 年に有限会社パリヤとなる。マルビシ百貨店がパリヤへ売却後、昭和 47 年に株式会社に組織変更し、昭和 62 年に旧マルビシ百貨店から撤退後は、彦根市長曾根南町へ移転し、現在もスーパーマーケットとして経営されている。パリヤ.“企業情報：沿革”. パリヤウェブサイト. 2021-4-1. <https://www.pariya.co.jp/>, (参照 2022-1-14)
- [註 6] 平和堂は、昭和 28 年にマルビシ百貨店のテナントとして夏原商店が開業し、昭和 32 年に「靴とカバンの店・平和堂」として株平和堂を設立。現在は滋賀県を中心に、近畿・北陸・東海の 2 府 7 県と中国湖南省にまでスーパーマーケットを展開している。
- 平和堂.“沿革：創業の時代 1957-1967”. 平和堂ウェブサイト. <https://www.heiwado.jp/>, (参照 2022-1-14)
- [註 7] 立命館大学 理工学部 阿部俊彦 研究室による 2020 年からの「彦根銀座商店街の防火建築帯の活用とそれによる街づくり」取り組みについては、以下を参照されたい。キャンパス SDGs びわ湖大会 オンライン活動紹介パネル.“立命館大学 阿部俊彦研究室”. note. 2021-10-21. https://note.com/campus_sdgs_usp/n/n70fe2443be58#NFxgi, (参照 2022-1-14)
- [註 8] 中日新聞.“懐かしのマルビシ百貨店に思いはせ 彦根で記録映像上映”. 中日新聞 Web. 2021-11-22. <https://www.chunichi.co.jp/article/370226>, (参照 2022-1-14)

参考文献

- [1] 夏原平次郎. おかげさまで八十年. 彦根, サンライズ印刷, 1999, 285p.
- [2] 平和堂. 奉仕と創造の 50 年：平和堂の歩み. 滋賀, 平和堂, 2007, 239p.
- [3] 渡辺守順監修. 湖東の今昔：保存版. 松本, 郷土出版社, 2005, 146p.
- [4] 三田村圭造編. 月間ひこね：彦根／知る・結ぶ・伝える総合文誌. 彦根, (株)中広 月刊ひこね編集室, 2004, no. 2.
- [5] 彦根市教育委員会編. 彦根市民文芸作品入選集. 彦根, 彦根市教育委員会, 2009, no. 45, p. 66.

